シグナルとシグナレス

宮沢賢治

「ガタンコガタンコ、シュウフッフッ、
　さそりの赤眼（あかめ）が　見えたころ、
　四時から今朝（けさ）も　やって来た。
　遠野（とおの）の盆地（ぼんち）は　まっくらで、
　つめたい水の　声ばかり。
ガタンコガタンコ、シュウフッフッ、
　凍（こご）えた砂利（じゃり）に　湯（ゆ）げを吐（は）き、
　火花を闇（やみ）に　まきながら、
　蛇紋岩（サアペンテイン）の　崖（がけ）に来て、
　やっと東が　燃（も）えだした。
ガタンコガタンコ、シュウフッフッ、

鳥がなきだし　木は光り、
青々川は　ながれたが、
丘(おか)もはざまも　いちめんに、
まぶしい霜(しも)を　載(の)せていた。
ガタンコガタンコ、シュウフッフッ、
やっぱりかけると　あったかだ、
僕(ぼく)はほうほう　汗(あせ)が出る。
もう七、八里(り)　はせたいな、
今日も一日　霜ぐもり。
ガタンガタン、ギー、シュウシュウ」

軽便鉄道の東からの一番列車が少しあわてたように、こう歌いながらやって来てとまりました。機関車の下からは、力のない湯げが逃げ出して行き、ほそ長いおかしな形の煙突からは青いけむりが、ほんの少うし立ちました。

そこで軽便鉄道づきの電信柱どもは、やっと安心したように、ぶんぶんとうなり、シグナルの柱はかたんと白い腕木を上げました。このまっすぐなシグナルの柱は、シグナレスでした。

シグナレスはほっと小さなため息をついて空を見上げました。空にはうすい雲が縞になっていっぱいに充

ち、それはつめたい白光を凍った地面に降らせながら、しずかに東に流れていたのです。

シグナレスはじっとその雲の行く方をながめました。それからやさしい腕木を思い切りそっちの方へ延ばしながら、ほんのかすかに、ひとりごとを言いました。

「今朝は伯母さんたちもきっとこっちの方を見ていらっしゃるわ」

シグナレスはいつまでもいつまでも、そっちに気をとられておりました。

「カタン」

うしろの方のしずかな空で、いきなり音がしました

のでシグナレスは急いでそっちをふり向きました。ずうっと積まれた黒い枕木の向こうに、あの立派な本線のシグナル柱が、今はるかの南から、かがやく白けむりをあげてやって来る列車を迎えるために、その上の硬い腕を下げたところでした。

「お早う今朝は暖かですね」本線のシグナル柱は、キチンと兵隊のように立ちながら、いやにまじめくさってあいさつしました。

「お早うございます」シグナレスはふし目になって、声を落として答えました。

「若さま、いけません。これからはあんなものにやた

らに声を、おかけなさらないようにねがいます」本線のシグナルに夜電気を送る太い電信柱がさももったいぶって申しました。

本線のシグナルはきまり悪そうに、もじもじしてだまってしまいました。気の弱いシグナレスはまるでもう消えてしまうか飛んでしまうかしたいと思いました。けれどもどうにもしかたがありませんでしたから、やっぱりじっと立っていたのです。

雲の縞は薄い琥珀の板のようにうるみ、かすかなかすかな日光が降って来ましたので、本線シグナルつきの電信柱はうれしがって、向こうの野原を行く小さな

荷馬車(にばしゃ)を見ながら低(ひく)い調子(ちょうし)はずれの歌をやりました。

「ゴゴン、ゴーゴー、
うすい雲から
酒(さけ)が降(ふ)りだす、
酒の中から
霜(しも)がながれる。
ゴゴン、ゴーゴー、
ゴゴン、ゴーゴー、
霜がとければ、
つちはまっくろ。

馬はふんごみ、
人もぺちゃぺちゃ。
ゴゴン、ゴーゴー」

それからもっともっとつづけざまに、わけのわからないことを歌いました。

その間に本線のシグナル柱が、そっと西風にたのんでこう言いました。

「どうか気にかけないでください。こいつはもうまるで野蛮なんです。礼式も何も知らないのです。実際私はいつでも困ってるんですよ」

軽便鉄道のシグナレスは、まるでどぎまぎしてうつむきながら低く、
「あら、そんなことございませんわ」と言いましたがなにぶん風下でしたから本線のシグナルまで聞こえませんでした。
「許してくださるんですか。本当を言ったら、僕なんかあなたに怒られたら生きているかいもないんですからね」
「あらあら、そんなこと」軽便鉄道の木でつくったシグナレスは、まるで困ったというように肩をすぼめましたが、実はその少しうつむいた顔は、うれしさにぽっ

と白光（しろびかり）を出していました。
「シグナレスさん、どうかまじめで聞いてください。僕あなたのためなら、次（つぎ）の十時の汽車が来る時腕（うで）を下げないで、じっとがんばり通してでも見せますよ」わずかばかりヒュウヒュウ言（い）っていた風が、この時ぴたりとやみました。
「あら、そんな事（こと）いけませんわ」
「もちろんいけないですよ。汽車が来る時、腕を下げないでがんばるなんて、そんなことあなたのためにも僕のためにもならないから僕はやりはしませんよ。けれどもそんなことでもしようと言（い）うんです。僕あなた

くらい大事なものは世界中ないんです。どうか僕を愛してください」

シグナレスは、じっと下の方を見て黙って立っていました。本線シグナルつきのせいの低い電信柱は、まだでたらめの歌をやっています。

「ゴゴンゴーゴー、
やまのいわやで、
熊が火をたき、
あまりけむくて、
ほらを逃げ出す。ゴゴンゴー、

田螺（にし）はのろのろ。
うう、田螺はのろのろ。
田螺のしゃっぽは、
羅紗（ラシャ）の上等（じょうとう）、ゴゴンゴーゴー」

本線（ほんせん）のシグナルはせっかちでしたから、シグナレスの返事（へんじ）のないのに、まるであわててしまいました。
「シグナレスさん、あなたはお返事をしてくださらないんですか。ああ僕（ぼく）はもうまるでくらやみだ。目の前がまるでまっ黒な淵（ふち）のようだ。ああ雷（かみなり）が落（お）ちて来て、一ぺんに僕のからだをくだけ。足もとから噴火（ふんか）が起（お）

こって、僕を空の遠くにほうりなげろ。もうなにもかもみんなおしまいだ。雷が落ちて来て一ぺんに僕のからだを砕（くだ）け。足もと……」

「いや若様（わかさま）、雷が参（まい）りました節（せつ）は手前（てまえ）一身（いっしん）におんわざわいをちょうだいいたします。どうかご安心（あんしん）をねがいとう存（ぞん）じます」

シグナルつきの電信柱（でんしんばしら）が、いつかでたらめの歌をやめて、頭の上のはりがねの槍（やり）をぴんと立てながら眼（め）をパチパチさせていました。

「えい。お前なんか何を言（い）うんだ。僕（ぼく）はそれどこじゃないんだ」

「それはまたどうしたことでござりまする。ちょっとやつがれまでお申(もう)し聞(き)けになりとう存(ぞん)じます」

「いいよ、お前はだまっておいで」

シグナルは高く叫(さけ)びました。しかしシグナルも、もうだまってしまいました。雲がだんだん薄(うす)くなって柔(やわ)らかな陽(ひ)が射(さ)して参(まい)りました。

五日の月が、西の山脈(さんみゃく)の上の黒い横雲(よこぐも)から、もう一ぺん顔を出して、山に沈(しず)む前のほんのしばらくを、鈍(にぶ)い鉛(なまり)のような光で、そこらをいっぱいにしました。

冬がれの木や、つみ重(かさ)ねられた黒い枕木(まくらぎ)はもちろんの

こと、電信柱までみんな眠ってしまいました。遠くの遠くの風の音か水の音がごうと鳴るだけです。

「ああ、僕はもう生きてるかいもないんだ。汽車が来るたびに腕を下げたり、青い眼鏡をかけたりいったいなんのためにこんなことをするんだ。もうなんにもおもしろくない。ああ死のう。けれどもどうして死ぬ。やっぱり雷か噴火だ」

本線のシグナルは、今夜も眠られませんでした。非常なはんもんでした。けれどもそれはシグナルばかりではありません。枕木の向こうに青白くしょんぼり立って、赤い火をかかげている軽便鉄道のシグナル、

すなわちシグナレスとても全(まった)くそのとおりでした。

「ああ、シグナルさんもあんまりだわ、あたしが言(い)えないでお返事(へんじ)もできないのを、すぐあんなに怒(おこ)ってお しまいになるなんて。あたしもう何もかもみんなおしまいだわ。おお神様(かみさま)、シグナルさんに雷(かみなり)を落(お)とす時、いっしょに私にもお落としくださいませ」

こう言(い)って、しきりに星空に祈(いの)っているのでした。ところがその声が、かすかにシグナルの耳にはいりました。シグナルはぎょっとしたように胸(むね)を張(は)って、しばらく考えていましたが、やがてガタガタふるえだしました。

ふるえながら言いました。

「シグナレスさん。あなたは何(なに)を祈っておられますか」

「あたし存(ぞん)じませんわ」シグナレスは声を落として答えました。

「シグナレスさん、それはあんまりひどいお言葉(ことば)でしょう。僕(ぼく)はもう今すぐでもお雷(らい)さんにつぶされて、または噴火(ふんか)を足もとから引っぱり出して、またはいさぎよく風に倒(たお)されて、またはノアの洪水(こうずい)をひっかぶって、死(し)んでしまおうと言うんですよ。それだのに、あなたはちっとも同情(どうじょう)してくださらないんですか」

「あら、その噴火や洪水を。あたしのお祈りはそれよ」

シグナレスは思い切って言いました。シグナルはもううれしくて、うれしくて、なおさらガタガタガタガタふるえました。

その赤い眼鏡もゆれたのです。

「シグナレスさん、なぜあなたは死ななけぁならないんですか。ね。僕へお話しください。ね。僕へお話しください。きっと、僕はそのいけないやつを追っぱらってしまいますから、いったいどうしたんですね」

「だって、あなたがあんなにお怒りなさるんですもの」

「ふふん。ああ、そのことですか。ふん。いいえ。そ

のことならばご心配ありません。大丈夫です。僕ちっとも怒ってなんかいはしませんからね。僕、もうあなたのためなら、眼鏡をみんな取られて、腕をみんなひっぱなされて、それから沼の底へたたき込まれたって、あなたをうらみはしませんよ」

「あら、ほんとう。うれしいわ」

「だから僕を愛してください。さあ僕を愛するって言ってください」

五日のお月さまは、この時雲と山の端とのちょうどまん中にいました。シグナルはもうまるで顔色を変えて灰色の幽霊みたいになって言いました。

「またあなたはだまってしまったんですね。やっぱり僕がきらいなんでしょう。もういいや、どうせ僕なんか噴火(ふんか)か洪水(こうずい)か風かにやられるにきまってるんだ」

「あら、ちがいますわ」

「そんならどうですどうです、どうです」

「あたし、もう大昔(おおむかし)からあなたのことばかり考えていましたわ」

「本当ですか、本当ですか、本当ですか」

「ええ」

「そんならいいでしょう。結婚(けっこん)の約束(やくそく)をしてください」

「でも」
「でもなんですか、僕(ぼく)たちは春になったら燕(つばめ)にたのんで、みんなにも知らせて結婚(けっこん)の式(しき)をあげましょう。どうか約束(やくそく)してください」
「だってあたしはこんなつまらないんですわ」
「わかってますよ。僕にはそのつまらないところが尊(とうと)いんです」
すると、さあ、シグナレスはあらんかぎりの勇気(ゆうき)を出して言(い)い出しました。
「でもあなたは金でできてるでしょう。新式でしょう。赤青眼鏡(あかあおめがね)を二組みも持(も)っていらっしゃるわ、夜も電燈(でんとう)

でしょう。あたしは夜だってランプですわ、眼鏡もただ一つきり、それに木ですわ」
「わかってますよ。だから僕はすきなんです」
「あら、ほんとう。うれしいわ。あたしお約束(やくそく)するわ」
「え、ありがとう、うれしいなあ、僕もお約束しますよ。あなたはきっと、私の未来(みらい)の妻(つま)だ」
「ええ、そうよ、あたし決(けっ)して変(か)わらないわ」
「結婚指環(エンゲージリング)をあげますよ、そら、ね、あすこの四つならんだ青い星ね」
「ええ」
「あのいちばん下の脚(あし)もとに小さな環(わ)が見えるでしょ

う、環状星雲ですよ。あの光の環ね、あれを受け取ってください。僕のまごころです」

「ええ。ありがとう、いただきますわ」

「ワッハッハ。大笑いだ。うまくやってやがるぜ」

突然向こうのまっ黒な倉庫が、空にもはばかるような声でどなりました。二人はまるでしんとなってしまいました。

ところが倉庫がまた言いました。

「いや心配しなさんな。この事は決してほかへはもらしませんぞ。わしがしっかりのみ込みました」

その時です、お月さまがカブンと山へおはいりに

なって、あたりがポカッと、うすぐらくなったのは。

今は風がぁんまり強いので電信柱（でんしんばしら）どもは、本線（ほんせん）の方も、軽便鉄道（けいべんてつどう）の方もまるで気が気でなく、ぐうんぐうん　ひゅうひゅう　と独楽（こま）のようにうなっておりました。それでも空はまっ青（さお）に晴れていました。

本線シグナルつきの太（ふと）っちょの電信柱も、もうでたらめの歌をやるどころの話ではありません。できるだけからだをちぢめて眼（め）を細（ほそ）くして、ひとなみに、ブウウ、ブウウとうなってごまかしておりました。

シグナレスはこの時、東のぐらぐらするくらい強い青びかりの中を、びっこをひくようにして走って行く

雲を見ておりましたが、それからチラッとシグナルの方を見ました。シグナルは、今日は巡査のようにしゃんと立っていましたが、風が強くて太っちょの電柱に聞こえないのをいいことにして、シグナレスに話しかけました。

「どうもひどい風ですね。あなた頭がほてって痛みはしませんか。どうも僕は少しくらくらしますね。いろいろお話ししますから、あなたただ頭をふってうなずいてだけいてください。どうせお返事をしたって僕のところへ届きはしませんから、それから僕の話でおもしろくないことがあったら横の方に頭を振ってくださ

い。これは、本当は、ヨーロッパの方のやり方なんですよ。向こうでは、僕たちのように仲のいいものがほかの人に知れないようにお話をする時は、みんなこうするんですよ。僕それを向こうの雑誌で見たんです。ね、あの倉庫のやつめ、おかしなやつですね、いきなり僕たちの話してるところへ口を出して、引き受けたのなんのって言うんですもの、あいつはずいぶん太ってますね、今日も眼をパチパチやらかしてますよ、僕のあなたに物を言ってるのはわかっていても、何を言ってるのか風でいっこう聞こえないんですよ、けれども全体、あなたに聞こえてるんですか、聞こえてる

なら頭を振ってください、ええそう、聞こえるでしょうね。僕たち早く結婚したいもんですね、早く春になれぁいいんですね、僕のところのぶっきりこに少しも知らせないでおきましょう。そしておいて、いきなり、ウヘン！　ああ風でのどがぜいぜいする。ああひどい。ちょっとお話をやめますよ。僕のどが痛くなったんです。わかりましたか、じゃちょっとさようなら」

それからシグナルは、ううううと言いながら眼をぱちぱちさせて、しばらくの間だまっていました。

シグナレスもおとなしく、シグナルののどのなおるのを待っていました。　電信柱どもはブンブンゴンゴ

ンと鳴り、風はひゅうひゅうとやりました。
　シグナルはつばをのみこんだり、ええ、ええとせきばらいをしたりしていましたが、やっとのどの痛(いた)いのがなおったらしく、もう一ぺんシグナレスに話しかけました。けれどもこの時は、風がまるで熊(くま)のように吼(ほ)え、まわりの電信柱(でんしんばしら)どもは、山いっぱいの蜂(はち)の巣(す)をいっぺんにこわしでもしたように、ぐゎんぐゎんとうなっていましたので、せっかくのその声も、半分ばかりしかシグナレスに届(とど)きませんでした。
「ね、僕(ぼく)はもうあなたのためなら、次(つぎ)の汽車の来る時、がんばって腕(うで)を下げないことでも、なんでもするんで

すからね、わかったでしょう。あなたもそのくらいの決心はあるでしょうね。あなたはほんとうに美しいんです、ね、世界の中にだっておれたちの仲間はいくらもあるんでしょう。その半分はまあ女の人でしょうがねえ、その中であなたはいちばん美しいんです。もっともほかの女の人僕よく知らないんですけれどね、きっとそうだと思うんですよ、どうです聞こえますか。僕たちのまわりにいるやつはみんなばかですね、のろまですね、僕のとこのぶっきりこが僕が何をあなたに言ってるのかと思って、そらごらんなさい、一生けん命、目をパチパチやってますよ、こいつときたら全く

チョークよりも形がわるいんですからね、そら、こんどはあんなに口を曲げていますよ。あきれたばかですねえ、僕の話聞こえますか、僕の……」

「若さま、さっきから何をべちゃべちゃ言っていらっしゃるのです。しかもシグナレス風情と、いったい何をにやけていらっしゃるんです」

いきなり本線シグナルつきの電信柱が、むしゃくしゃまぎれに、ごうごうの音の中を途方もない声でどなったもんですから、シグナルはもちろんシグナレスも、まっ青になってぴたっとこっちへ曲げていたからだを、まっすぐに直しました。

「若さま、さあおっしゃい。役目として承らなければなりません」

シグナルは、やっと元気を取り直しました。そしてどうせ風のために何を言ってても同じことなのをいいことにして、

「ばか、僕はシグナレスさんと結婚して幸福になって、それからお前にチョークのお嫁さんをくれてやるよ」

と、こうまじめな顔で言ったのでした。その声は風下のシグナレスにはすぐ聞こえましたので、シグナレスはこわいながら思わず笑ってしまいました。さあそれを見た本線シグナルつきの電信柱の怒りようと言った

らありません。さっそくブルブルッとふるえあがり、青白く逆上（のぼ）せてしまい唇（くちびる）をきっとかみながらすぐひどく手をまわして、すなわち一ぺん東京まで手をまわして風下（かざしも）にいる軽便鉄道（けいべんてつどう）の電信柱に、シグナルとシグナレスの対話（たいわ）がいったいなんだったか、今シグナレスが笑ったことは、どんなことだったかたずねてやりました。

　ああ、シグナルは一生の失策（しっさく）をしたのでした。シグナレスよりも少し風下にすてきに耳のいい長い長い電信柱がいて、知らん顔をしてすまして空の方を見ながらさっきからの話をみんな聞いていたのです。そこで

さっそく、それを東京を経て本線シグナルつきの電信柱に返事をしてやりました。本線シグナルつきの電信柱はキリキリ歯がみをしながら聞いていましたが、すっかり聞いてしまうと、さあ、まるでばかのようになってどなりました。

「くそっ、えいっ。いまいましい。あんまりだ。犬畜生、あんまりだ。犬畜生、ええ、若さま、わたしだって男ですぜ。こんなにひどくばかにされてだまっているとお考えですか。結婚だなんてやれるならやってごらんなさい。電信柱の仲間はもうみんな反対です。シグナル柱の人たちだって鉄道長の命令にそむける

もんですか。そして鉄道長はわたしの叔父ですぜ。結婚なりなんなりやってごらんなさい。えい、犬畜生め、えい」

本線シグナルつきの電信柱は、すぐ四方に電報をかけました。それからしばらく顔色を変えて、みんなの返事をきいていました。確かにみんなから反対の約束をもらったらしいのでした。それからきっと叔父のその鉄道長とかにもうまく頼んだにちがいありません。シグナルもシグナレスも、あまりのことに今さらポカンとしてあきれていました。本線シグナルつきの電信柱は、すっかり反対の準備ができると、こんどは急に

泣き声で言いました。
「ああ、八年の間、夜ひる寝ないでめんどうを見てやってそのお礼がこれか。ああ情けない、もう世の中はみだれてしまった。ああもうおしまいだ。なさけない、メリケン国のエジソンさまもこのあさましい世界をお見すてなされたか。オンオンオンオン、ゴゴンゴーゴーゴゴンゴー」
風はますます吹きつのり、西の空が変に白くぼんやりなって、どうもあやしいと思っているうちに、チラチラチラチラとうとう雪がやって参りました。
シグナルは力を落として青白く立ち、そっとよこ眼

でやさしいシグナレスの方を見ました。シグナレスはしくしく泣きながら、ちょうどやって来る二時の汽車を迎えるためにしょんぼりと腕をさげ、そのいじらしいなで肩はかすかにかすかにふるえておりました。空では風がフイウ、涙を知らない電信柱どもはゴゴンゴーゴーゴゴンゴーゴー。

さあ今度は夜ですよ。シグナルはしょんぼり立っておりました。

月の光が青白く雲を照らしています。雲はこうこうと光ります。そこにはすきとおって小さな紅火や青の

火をうかべました。しいんとしています。山脈は若い白熊の貴族の屍体のようにしずかに白く横たわり、遠くの遠くを、ひるまの風のなごりがヒュウと鳴って通りました。それでもじつにしずかです。黒い枕木はみな眠り、赤の三角や黄色の点々、さまざまの夢を見ている時、若いあわれなシグナルはほっと小さなため息をつきました。そこで半分凍えてじっと立っていたやさしいシグナレスも、ほっと小さなため息をしました。

「シグナレスさん、ほんとうに僕たちはつらいねえ」

たまらずシグナルがそっとシグナレスに話しかけま

した。

「ええ、みんなあたしがいけなかったのですわ」シグナレスが青じろくうなだれて言いました。

諸君、シグナルの胸は燃えるばかり、

「ああ、シグナレスさん、僕たちたった二人だけ、遠くの遠くのみんなのいないところに行ってしまいたいね」

「ええ、あたし行けさえするなら、どこへでも行きますわ」

「ねえ、ずうっとずうっと天上にあの僕たちの婚約指環よりも、もっと天上に青い小さな小さな火が

見えるでしょう。そら、ね、あすこは遠いですねえ」
「ええ」シグナレスは小さな唇（くちびる）で、いまにもその火にキッスしたそうに空を見あげていました。
「あすこには青い霧（きり）の火が燃（も）えているんでしょうね。その青い霧の火の中へ僕たちいっしょにすわりたいですねえ」
「ええ」
「けれどあすこには汽車はないんですねえ、そんなら僕畑（ぼくはたけ）をつくろうか。何か働（はたら）かないといけないんだから」
「ええ」

「ああ、お星さま、遠くの青いお星さま、どうか私どもをとってください。ああなさけぶかいサンタマリヤ、まためぐみふかいジョウジ　スチブンソンさま、どうか私どものかなしい祈りを聞いてください」

「ええ」

「さあいっしょに祈りましょう」

「ええ」

「あわれみふかいサンタマリヤ、すきとおる夜の底、つめたい雪の地面の上にかなしくいのるわたくしどもをみそなわせ、めぐみふかいジョウジ　スチブンソンさま、あなたのしもべのまたしもべ、かなしいこのた

ましいの、まことの祈りをみそなわせ、ああ、サンタマリヤ」

「ああ」

星はしずかにめぐって行きました。そこであの赤眼のさそりが、せわしくまたたいて東から出て来、そしてサンタマリヤのお月さまが慈愛にみちた尊い黄金のまなざしに、じっと二人を見ながら、西のまっくろの山におはいりになった時、シグナル、シグナレスの二人は、祈りにつかれてもう眠っていました。

今度はひるまです。なぜなら夜昼はどうしてもかわ

るがわるですから。

ぎらぎらのお日さまが東の山をのぼりました。シグナルとシグナレスはぱっと桃色に映えました。いきなり大きな幅広い声がそこらじゅうにはびこりました。

「おい。本線シグナルつきの電信柱、おまえの叔父の鉄道長に早くそう言って、あの二人はいっしょにしてやった方がよかろうぜ」

見るとそれは先ごろの晩の倉庫の屋根でした。倉庫の屋根は、赤いうわぐすりをかけた瓦を、まるで鎧のようにキラキラ着込んで、じろっとあたりを見まわしているのでした。

本線シグナルつきの電信柱は、がたがたっとふるえて、それからじっと固(かた)くなって答えました。

「ふん、なんだと、お前はなんの縁故(えんこ)でこんなことに口を出すんだ」

「おいおい、あんまり大きなつらをするなよ。ええおい。おれは縁故と言えば大縁故さ、縁故でないと言(い)えば、いっこう縁故でもなんでもないぜ、が、しかしさ、こんなことにはてめえのような変(へん)ちきりんはあんまりいろいろ手を出さない方が結局(けっきょく)てめえのためだろうぜ」

「なんだと。おれはシグナルの後見人(こうけんにん)だぞ。鉄道長の

甥だぞ」
「そうか。おい立派なもんだなあ。シグナルさまの後見人で鉄道長の甥かい。けれどもそんならおれなんてどうだい。おれさまはな、ええ、めくらとんびの後見人、ええ風引きの脈の甥だぞ。どうだ、どっちが偉い」
「何をっ、コリッ、コリコリッ、カリッ」
「まあまあそう怒るなよ。これは冗談さ。悪く思わんでくれ。な、あの二人さ、かあいそうだよ。いいかげんにまとめてやれよ。大人らしくもないじゃないか。あんまり胸の狭いことは言わんでさ。あんな立派な後見人を持って、シグナルもほんとうにしあわせだと

言われるぜ。まとめてやれ、まとめてやれ」

本線(ほんせん)シグナルつきの電信柱(でんしんばしら)は、物(もの)を言おうとしたのでしたが、もうあんまり気が立ってしまってパチパチパチパチ鳴(な)るだけでした。倉庫(そうこ)の屋根(やね)もあんまりのその怒りように、まさかこんなはずではなかったと言うように少しあきれて、だまってその顔を見ていました。お日さまはずうっと高くなり、シグナルとシグナレスとはほっとまたため息(いき)をついてお互(たが)いに顔を見合わせました。シグナレスは瞳(ひとみ)を少し落(お)とし、シグナルの白い胸(むね)に青々と落ちた眼鏡(めがね)の影(かげ)をチラッと見て、それからにわかに目をそらして自分のあしもとをみつ

め考え込んでしまいました。

今夜は暖かです。

霧がふかくふかくこめました。

その霧を徹して、月のあかりが水色にしずかに降り、電信柱も枕木も、みんな寝しずまりました。

シグナルが待っていたようにほっと息をしました。シグナレスも胸いっぱいのおもいをこめて、小さくほっといきしました。

その時シグナルとシグナレスとは、霧の中から倉庫の屋根の落ちついた親切らしい声の響いて来るのを聞

きました。
「お前たちは、全くきのどくだね、わたしたちは、今朝うまくやってやろうと思ったんだが、かえっていけなくしてしまった。ほんとにきのどくなことになったよ。しかしわたしには、また考えがあるから、そんなに心配しないでもいいよ。お前たちは霧でお互いに顔も見えずさびしいだろう」
「ええ」
「ええ」
「そうか、ではおれが見えるようにしてやろう。いいか、おれのあとについて二人いっしょにまねをするん

だぜ」
「ええ」
「そうか。ではアルファー」
「アルファー」
「ビーター」「ビーター」
「ガムマー」「ガムマーアー」
「デルター」「デールータァーアアア」
実に不思議です。いつかシグナルとシグナレスとの二人は、まっ黒な夜の中に肩をならべて立っていました。
「おや、どうしたんだろう。あたり一面まっ黒びろう

どの夜だ」

「まあ、不思議ですわね。まっくらだわ」

「いいや、頭の上が星でいっぱいです。おや、なんという大きな強い星なんだろう。それに見たこともない空の模様ではありませんか、いったいあの十三連なる青い星はどこにあったのでしょう、こんな星は見たことも聞いたこともありませんね、僕たちぜんたいどこに来たんでしょうね」

「あら、空があんまり速くめぐりますわ」

「ええ、ああ、あの大きな橙の星は地平線から今上ります。おや、地平線じゃない。水平線かしら。そう

です。ここは夜の海の渚（なぎさ）ですよ」
「まあ奇麗（きれい）だわね、あの波（なみ）の青びかり」
「ええ、あれは磯波（いそなみ）の波がしらです、立派（りっぱ）ですねえ、行ってみましょう」
「まあ、ほんとうにお月さまのあかりのような水よ」
「ね、水の底に赤いひとでがいますよ。銀水（ぎんいろ）「#「銀水（ぎんいろ）」はママ」のなまこがいますよ。ゆっくりゆっくり、這（は）ってますねえ、それからあのユラユラ青びかりの棘（とげ）を動かしているのは、雲丹（うに）ですね。波が寄（よ）せて来ます。少し遠のきましょう」
「ええ」

「もう、何べん空がめぐったでしょう。たいへん寒くなりました。海がなんだか凍ったようですね。波はもう、うたなくなりました」
「波がやんだせいでしょうかしら。何か音がしていますわ」
「どんな音」
「そら、夢の水車のきしりのような音」
「ああそうだ。あの音だ。ピタゴラス派の天球運動の諧音です」
「あら、なんだかまわりがぼんやり青白くなってきましたわ」

「夜が明けるのでしょうか。いやはてな。おお立派だ。あなたの顔がはっきり見える」

「あなたもよ」

「ええ、とうとう、僕たち二人きりですね」

「まあ、青白い火が燃えてますわ。まあ地面と海も。けど熱くないわ」

「ここは空ですよ。これは星の中の霧の火ですよ。僕たちのねがいがかなったんです。ああ、さんたまりや」

「ああ」

「地球は遠いですね」

「ええ」

「地球はどっちの方でしょう。あたりいちめんの星、どこがどこかもうわからない。あの僕のブッキリコはどうしたろう。あいつは本当はかあいそうですね」

「ええ、まあ、火が少し白くなったわ、せわしく燃えますわ」

「きっと今秋ですね。そしてあの倉庫の屋根も親切でしたね」

「それは親切とも」いきなり太い声がしました。気がついてみると、ああ、二人ともいっしょに夢を見ていたのでした。いつか霧がはれてそら一めんの星が、青や橙やせわしくせわしくまたたき、向こうにはまっ

黒な倉庫の屋根が笑いながら立っておりました。
二人はまたほっと小さな息をしました。

底本：「セロ弾きのゴーシュ」角川文庫、角川書店
１９５７（昭和32）年11月15日初版発行
１９６７（昭和42）年４月５日10版発行
１９９３（平成５）年５月20日改版50版発行
初出：「岩手毎日新聞」
１９２３（大正12）年５月
入力：土屋隆
校正：田中敬三
２００８年３月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。